

燃える髪風にはためき

新井登美子



ゆみる出版

燃える髪風にはためき



新井登美子

ゆみる出版

著者紹介

あらいとみこ
新井登美子

1955年 静岡県に生まれる。

現住所 国立市中 1-20-23-202

燃える髪風にはためき

1984年 6 月20日 初版第 1 刷発行 定価1200円

© 著 者 新井登美子

発行者 田 辺 肇

発行所 株式会社 ゆ み る 出 版

東京都新宿区新宿 1-7-10-504 電話03(352)2313・振替東京2-37316

印刷・文昇堂／製本・東和製本

0095-840810-8661

燃える髪風にはためき 目次

I

ひと夏の家族 7

イタリアから機能回復室へ

39

II

父 71

めまぐるしい季節に 96

III

付添女たち 115

いこいのみぎわに 159

通過する部屋 192

帚星 223

装
幀
貝
原
浩

燃える髪風にはためき

I

ひと夏の家族

「花で飾らなくっちゃ」

母から手渡された少しさびついた花鋏ばさみをそれぞれに持って、私と姉は夏の朝の庭へひょいとびおりる。夏休みの間はたいていいつもストンと風通しのいい単服を着ているのだけれど、今日は特別の日だから二人して学校の制服姿。九月までは着ることもないはずと思っていた白い半袖のセーラー服をとり出し、左ポケットに校章バッジをつけて頭からかぶり、ゆるりと胸元に紺色のリボンを結ぶ。そして、昨夜上手に寝押しのできたひだスカートをかけば、何の変哲もない朝は少しだけあらたまってすがすがしく、たくさんの人が来るだろう今日一日が、うつとうしくにぎやかに思えてくるのだった。

「夾竹桃にしよう」

八重に咲いた桃色の花を見上げながら姉が言う。背伸びをして枝をひき寄せ、パチン、パチンと鉢を入れながら、

「でもこれきりじゃ寂しくない？」

と私がきくと、

「いいのよ、いただいた菊があるから、白や黄色のがたくさんあるから」

パチン、パチン。あとは二人して黙って鉢を入れる。蟬はまだ鳴き出さない。遠くに波の音。ああ今日は海が荒れているなと思う。パチン、パチン。使い慣れぬうえに少しさびついた花鉢は、はじまったばかりの朝に思いきりの悪い音をたて、無理やりねじるようにして切りとる花の切り口は、どれも皆不揃いでむごい形になってしまう。私と姉は花作りの娘たちのように腕にかかえた花束の収穫を見せあい、

「これくらいでいいね」

とうなずき、また家にあがる。そして棺の中に眠る父のまわりに華やかな夏のありったけを盛り込むのだけれど、ドライアイスの冷気に囲まれた父の体は硬く、鼻孔に詰められた白い綿を見れば、ああこれはかつて父であったところの物体、これはぬけがら、これは剝製、もう花の香りもなにかぎわけれるはずのない固まりと気づく。かすかに浮かんだ顚顚の痣は、パレ

ットの上で混ぜ合わせて作る水彩絵の具の紫色、ほかには染みひとつないきれいな顔ではあるけれど、やはりこれは父ではない。やがて梱包され、どこかへと運び去られてしまう場所ふさぎの木箱が、ゴロリと北を向いて横たわっているそれだけのこと。そして読経、そして火、そして骨。どうっていうこともない白い燃えかすだった。放課後の生物室で一人見た人骨標本の方がずっとずっと怖かった。母から姉へ、姉から私へ、私から弟へとぎこちないゲームのように竹のはしを使って骨をひき渡し、貝殻のようにガチャガチャと壊して壺^{つぼ}に納め、きちりと蓋を閉じてしまえばもう父も花も消えた。暑かったのを覚えている。パタパタと揺れ動く香りのいい扇子や、しきりに襟元の汗をぬぐうハンカチを見た。つがれたビールをぐいと飲み干すおいしいような喉も見た。私は二匹のチンパンジーの出るCMで好きだったオレンジ色のジュースを飲み、せわしく働く母や、キョトンと座っている弟、そしてたくさんの同級生に囲まれて涙ぐんでいる姉を眺め、投げやりにくずした横座りのままで冷えて硬くなったエビフライをつつきへもうビンタをくらうこともないな」と思っていた。

それが十六年前のことである。

思いたってしまった。だからやるしかない。今は行動あるのみなのだ。私は東京のとある街角にいる。「えーと、あれは、あっせん業、あっせん業」。

陽に焼けて黄色くなった埃だらけの職業別電話帳をかかえて赤電話の前に立つ。ダイヤルを回す指先にいささかの力みあり。

「もしもし、三井家政婦会ですが」

「あ、あの私、そちらで働かせていただけないかと思ひまして」

「経験は？」

「一年半ほど」

「お幾つ？」

「二十五になります」

「ちよつと若すぎるんじゃない、考え直した方が身のためよ、おやめなさい」

ガチャン！ ムッ。そんじょそこいらのヤングと同じだなんて思わないでよね。

「はい、かもめ紹介所です」

こうして私は東京のはずれ、三多摩地区の家政婦紹介所のいくつかに電話をかけ、若いということが必ずしも歓迎されぬこの業界にもぐり込むべく、あたりをつけていったのだった。

「あら経験があるんなら若くたってかまわないわよ。ともかく一度うちへいらっしやい。えーとね、立川で降りたら伊勢丹の通りをまっすぐ行って……」

言われるがままにその足で訪ねていった。しかし今でこそ立川も整備されているけれど、通り一本裏に入ればなにやら不気味な気配も漂うかつての基地の街である。交差点を越え、アーケードをつき抜け、不動産屋の角を折れ曲がると、路地裏だというのに毒々しい中華飯店。金文字の屋号の下には緑色の獅子と真っ赤な獅子が向かいあって牙をむき出し、その足元のすすけたガラスのサンブルケースの中には、埃っぽくこわばった麻婆豆腐やら八宝菜やらのろう細工がちんまりと並べられている。半間ほどの道幅を奥に進むと次には赤ちょうちん。昼下がりの曇り空の下で見る、いかにもうらぶれたこんな通りのその先に、めざす紹介所が本当にあるのかと、おっかなびっくり私は歩いてゆく。あった！

『中村家政婦紹介所』

「労働大臣認可」と唯一の権威を書き加えた横長の看板がかかる家。しかしここはなんとも……うーん、香港あたりにでも売りとばされそうな気配ではないか。B級映画じゃないけれど、開けたとたんにアヘン窟、つるつる頭に三ッ編の筋骨隆々刺青男がぬっと現われ私を値ぶみし、

「上海、一〇〇\$横浜船便」

あつという間にぐるぐる⁺簀巻き、哀れ私はからゆきさん……。などということがあるはずないか。ドアを開ける。

「ごめんください、あの先ほどお電話したものですけど」

「あ、いらっしゃい、どうぞ」

当たり前の家であった。事務机が四つほど並び、乱雑に積まれたなにかしらの書類と電話が数台、簡単な応接セットがひと組。そして私を迎えてくれたのは、小さいわりにはよく映える黒のブードル犬一匹。キャンキャンキャンキャン、ヒステリックなハイトーンの声で叫びたて、オレのなわばりに入るんじゃねえと必死の威嚇的態度を表わすのである。

「こちらクロちゃん、静かになさい」

ブードルを抱きかかえるふくらとしたこの女の人が会長氏であろうか。

「で、お宅は今お一人？　そう、なら泊り込みもできるわね。手術の患者さんには付ける？」

あ、できると……じゃ二人付きは？　精神科の人は？　伝染病は？」

おそろしい会話がサラリサラリとかわされてゆく。アヘン窟ではないにせよ、やはりここは地獄への入り口なのだろうか。

人は家政婦というといったい何を思うのだろう。ちょっと裕福な某企業の社長宅に住み込ん

で働くう、ばとか、通いでやってくるお掃除のねえや、もしくは下働きの女中の類いの下々の者のつく職業、とまあこの程度の連想しかもないのにちがいない。だが私は個人宅に入る家政婦になる気はなかった。私になろうとしているのは、病院まわり専門の、患者付添い看護人なのである。西へ東へと病む人の待つ病室を訪ねて渡り歩く、さすらいのお助け女になるつもりで私であった。若い娘が、なんでもまた。

「田舎に仕送りでもしてるの？」

「は？ いえ、そうだったことは全く……」

よくよく思いつめた末に必死の覚悟で始めたか、それとも聞くも涙、語るも涙の身の上で、人に売られて越後獅子的にやってきたのか、会長氏は素姓の知れぬこの新顔娘に対して軽いさぐりを入れてくる。だがここを訪ねてくる女たちのほとんどが「わけあり」の過去を語りがらぬ者であることを知っているのだから彼女は、

「そ、まあいいわ、それじゃ仕事が入ったらお宅の方へ電話を入れるから、この番号でいいのね」

と事務的にコトを運ぶのだった。その実、心は、さてさてこの娘にどれほどのことが出来るのやら、ま、あてにはすまい、どうせすぐにも逃げ帰る、よくあるテのひやかしであらうけれ

ど、期待はせずに見てみましょ、といったところだろうか。

キャンキャンキャンキャン。

「こらこらクロちゃん、吠えるんじゃないの」

「それじゃ、私失礼します」

「はい、ごくろうさま」

表に出る。ホッとため息ひとつ。やれやれこれでなんとか食べてゆけるだろう。大丈夫、どこだって同じこと、むこうでだってやれたんだから、こっちでだってやれないわけではない。仕事にかわりはないんだから、できるできる。

私は一人自分にこういきかせ、にぶい光の秋の空を見上げた。雀さえすすけている街、けんめいにさえずって餌を求めている街がその下にはあった。そして振り返れば、さっきまでのびくついてみえた通りはもはや何の変哲もないただの通りにすぎず、毒々しい獅子たちもまたからいばりの咆哮（ほうこう）をする瀬戸物でしかなかった。そこにも人は生きている……。

こうして私は、今後次々と開けるはめになるだろう扉のことは考えもせずに、第一の門である開かずの扉を開けてしまったのだった。腹は決まった、あとは待つだけ。それまでしばし、構えたばかりのささやかな巢ですすけた羽でもつくろうとするか。時を待つ人を待つ。そして